

限界をおかない

— 研究開発者の姿勢 —

研究開発部 矢口みどり

▼自分を知ることからスタート

浅川千恵子さん、昨年6月にIBM社のフェローになった方である。IBM社のフェローは「業界をリードするイノベーションや世界中の顧客やビジネスパートナーとの協働を通じて技術的に優れた功績を上げた社員」に与えられる最高職位で、全世界の社員3万人の中で120人、日本人では5人、女性では初ということで大変話題になり、その人となりかTVなどで紹介された。

浅川さんは小学生のときの事故が原因で、14歳で失明した。その後、盲学校、大学(中退)、職業訓練校を経て、IBMの障害者向けシステム開発のテスト生として入社。そこで、自分には障害者の立場に立ったシステム作りのための視点があるということを初めて意識した。その視点で障害者のためのシステムのあり方を考えることができる。障害者であるという自分の弱みは、障害者のためのシステム作りには強みになる。そこから、彼女の研究者としての人生が始まった。誰にでもそういうものがある。自分を知る、自分の視点を活かす、それが大事だと彼女は言う。

▼限界を置かない

現在浅川さんが7人の部下と取り組んでいるのは、視覚障害者がインターネットを使いやすくするための「ささやきソフト」。声でモニター上に表示されている内容や、操作の仕方を案内するものである。若い研究者が、研究段階のプログラムを見てもらいにやってくる。今できることを最大限盛り込んだと報告する彼に、開発を考えるとときには限界を置くべきでない、と彼女は言う。

▼「できること」ではなく「あるといいな」と思うことを目指す

今の技術でできることを考えるのではなく、必要なこと、あるといいなあとと思うこと、人をいきいきとさせることを考えるようにと、浅川さんは言う。そしてそれを実現するにはどうするかを考えていくのだとアドバイスする。研究開発は、大きな目標、理想を持ってそれに向かう姿勢が重要だということである。そうでなければ、今できることの組み合わせにすぎなくなって、新たな発見・発展はないということだ。

▼仲間でつくりあげる

研究開発を進めていくうえで、浅川さんが大事にしているのが、仲間との徹底したディスカッションだ。チーム浅川8人。仲間いかに自分の視点を伝え、仲間からアイデアを引き出すか。仲間に語ることで、また、自分の考えも整理される。そのための日々のディスカッションの時間を大事にしている。一人の視点、一人の力には限界がある。よい研究よいシステム作りには、多くの視点と力が必要だということを、浅川さんは体験的につかんできたのである。

浅川千恵子さん、その行動姿勢は、教育を担当するものが、育てるべき目標とする具体的な人間像の一つではないか。

JADEC ニュース 81 号 (2010/7/30) より